



森の生活

# 2017年度 年次報告書



## 森の生活のミッション

### 森林を活かし、 人々の心豊かなくらしと 持続可能な地域づくりに貢献する。

私たちはみんな「森の生活」を送っています。

森に囲まれた暮らしだけが森の生活ではありません。  
日々の暮らしの中にある森から生まれたものについて想いを馳せてみると、私たちの暮らしが思いのほか森とつながっていることに気づきます。しかし、直接森にかかわったり、森のことを考えたりする機会は少ないのではないのでしょうか。

日本は森林率 67%と世界でも有数の森の国です。しかし、木材の多くを海外からの輸入に頼る一方、国内では森林が十分に活かされていない状況にあります。驚くことに、森が身近にある農山村においてさえ、多くの人々にとって、森は近いようで遠い存在です。かつて日本で行われていた暮らしの中に森を活かす文化を、今、新しい形で蘇らせられないのでしょうか。

身近な森から生まれた製品を購入したり、休日を森で過ごしたり、森に関わる仕事に携わったり。そんな機会を創造していくことで、農山村、都市の隔てなく広がる人の数だけある「森の生活」が、森を育て、そして一人一人の暮らしや人生をもっと心豊かにするはずです。

NPO法人森の生活は、森のある暮らしを広める活動を通じて、人々と自然が調和した豊かな社会づくりに取り組みます。



## 目次

P 1	森の生活のミッション
P 2	2017 年度活動ハイライト
P 3	なぜ森林をテーマに活動しているの…?
P 5	活動報告
P 5	森の体験事業
P 11	森のまちづくり事業
P 15	森のめぐみを届ける事業
P16	森の生活の SDGs に関する基本方針
P17	会計報告 エネルギー消費量
P18	理事・スタッフ紹介 団体概要 森の生活年表



## 2017 年度 活動ハイライト

子どもから大人まで、森で遊び、学ぶ機会を提供します。



- ・森林環境教育を、延べ 1,122 人の子どもたちに 39 プログラムを提供しました。
- ・森林体験・視察プログラムを 31 件提供し、155 人の方々にご参加いただきました。
- ・オーダーメイドのプログラムを 17 件提供し、580 人の方々にご参加いただきました。
- ・指定管理者として管理運営を行う「森のなかヨックル」を、1,604 人の方々にご利用いただきました。

住む人、訪れる人、どちらにとっても魅力ある、森を活かした地域づくりに取り組みます。



- ・指定管理者として管理運営を行う森林「美桑が丘」を延べ 2,614 人の方々にご利用いただきました。
- ・小規模多機能自治を推進するために、3 つの自治体から 34 人が参加し仕組みや事例について学びました。
- ・ローカルベンチャーの推進に取り組み、全 9 回のローカルベンチャーラボに加え、8 件の関連イベントに協力を行いました。延べ 200 名以上のイベント参加、1 人の移住・起業者を生み出しました。

下川の森から生まれた体験・製品・物語を届けます。



- ・地域内で有効利用されていなかった広葉樹丸太 30.9m<sup>3</sup> を購入し、製材・乾燥したほか、木工用材や加工製品延べ 35 件の販売を行いました。
- ・北大マルシェと連携し、下川の森から生まれた商品を物販コーナーに設置しました。

# なぜ森林をテーマに活動しているの…?



それはね 1

森林は、人が生きるうえで大切な役割をたくさん担っているからです。

もしこの世から森が消えてしまったら、どんなことが起こるでしょう。住んでいる家の材料は？学校や仕事で使う紙の原料は？動物たちの住みか？呼吸に必要な酸素は？いろいろと困ることが起きそうです。人は、森なしでは生きられません。だから、森のことに理解を深め、適切に関わることが大切だと考えます。

## 森林の多面的機能

- 生物多様性保全
- 地球環境保全
- 土砂災害防止機能 / 土壌保全機能
- 水源涵養機能
- 快適環境形成機能
- 保健・レクリエーション機能
- 文化機能
- 物質生産機能



それはね 2

日本は先進国ではトップクラスの森林率。北海道の森林面積は日本の森林面積の約4分の1。豊かな森林を活かすことが大切であると考えます。

日本は国土面積の約7割が森林と、先進国の中ではトップクラスで森が豊かな国です。そして、私たちの暮らす北海道の森林面積は約550万haで、全国の森林面積の約4分の1に匹敵します。豊かな森を次世代に引き継ぐとともに、適切に活かすことが、とても大切だと考えます。

## 世界の国々の森林率

国名	森林率
フィンランド	73%
日本	69%
アメリカ	34%
中国	22%
イギリス	13%

(出典：FAO「Global Forest Resources Assessment 2015」)



それはね 3

北海道産材の自給率は約55%とまだまだ伸びしろがあります。

日本の木材自給率 約3割に比較すれば、北海道の木材自給率は高い状況ですが、北海道にある約150万haの人工林のうち5-8割が伐採時期を迎えているといわれています(北海道の森林・林業・木材産業の主なデータ [2014年7月北海道水産林務部])。人工林は人が関わり、手入れする作業が欠かせません。手入れを促すには、適切に育てた森林から伐採された木材を利用する人々を増やすことが重要だと思っています。

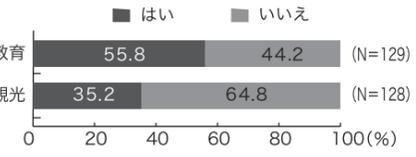


それはね 4

森林での教育・観光分野での取り組みにも活用の余地があります。

森の生活が2012年に実施した調査によると、北海道内の市町村の森林の活用について、教育分野では約6割、観光分野では4割の自治体しか取り組んでいないことが明らかになりました。森林空間の利用についても大きな余地があることがわかりました。森林環境教育や宿泊・森林体験プログラムを通して、森林の活用の可能性を広げていきたいと思っています。

## 「森林の利活用に取り組んでいますか？」



(出典：「北海道 森で元気になる白書! - 健康・教育・観光分野における森林の利活用調査報告書 -」)  
\*森の生活ホームページ「実績・報告」→「各種報告書」からご覧いただけます。

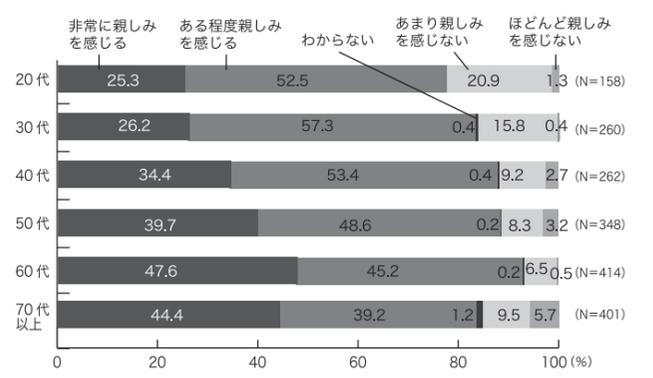


それはね 5

世代が低くなるほど、森林に親しみを感じにくくなる傾向にあります。

近年、環境問題や国産材の普及を通じて森への関心は高まりつつありますが、森に親しみを感ずる度合いは、世代が低くなるほど低下する傾向にあるようです。現代生活では森林との関わりを実感しにくくなっているのではないのでしょうか。そのような中、森の生活は、現代のニーズや課題に即した形で、森や木に触れる機会を創造していきたいと思っています。

## 森林への親しみ



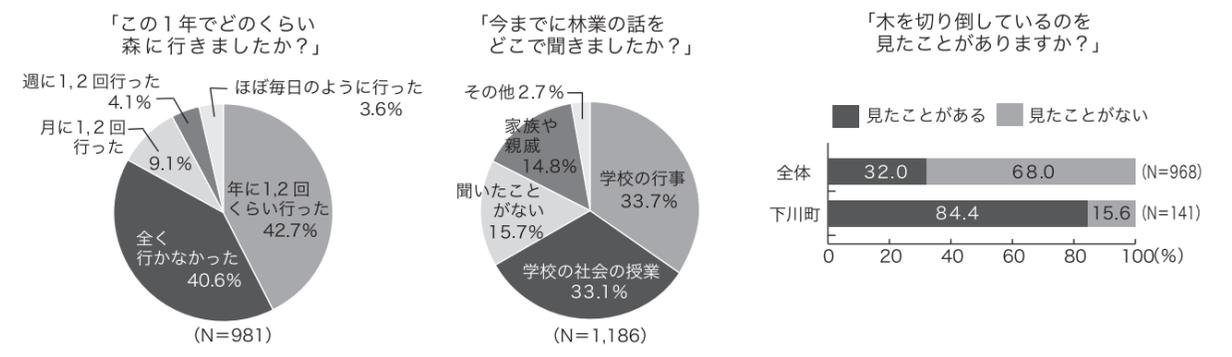
(出典：総務省「森林と生活に関する世論調査(平成24年)」)



それはね 6

自然豊かな道北地域の子もたちでさえ、約8割の子もが、森に行く回数が年に2回以下という状況です。

田舎の子もたちは自然の中でよく遊ぶイメージがあるかもしれませんが、残念ながら、実際はそうでもないのが現状です。2012年に森の生活が実施した調査では、北海道上川管内の森林率8割以上の小・中学生のうち年に森に行く回数が2回以下の子どもたちが約8割で、その約半数がまったく行かなかった状況にあることがわかりました。また、林業に触れる機会について、木の伐採風景を「見たことがある」割合は全体では約3割と低い状況でしたが、学校教育の中で森林環境教育を行う下川町では、8割以上でした。また、林業について話を聞いた機会も、6割超が「学校」であり、学校教育の中で機会を提供することが大切であると言えます。



調査対象：北海道上川管内における森林率80%以上の市町村の小学校4~6年生、中学校1~3年生の全児童  
 (出典：「森林に対する意識に関するアンケート調査」)  
 \*森の生活ホームページ「実績・報告」→「各種報告書」からご覧いただけます。

私たちは森林という切り口で、持続可能な地域づくりにアプローチします。

現在約3,400人の人口規模の下川も、2030年には約2,500人にまで減少するという試算があります。このような状況の中、可能性を見つけて切り拓く「人」が何より大切です。環境、教育、経済、働き方、エネルギー、医療・福祉…それぞれに課題と可能性を有するこれらのテーマは、地域のなかですべてつながっています。課題解決や理想の実現に向けて、私たち1人1人の選択と行動が未来につながっています。私たちは森林という切り口で、持続可能な地域づくりにアプローチします。





## 活動報告 森林環境教育事業

延べ **1,122** 人の子どもたちに **39** プログラムを提供しました。

森の生活では、下川町からの委託を受け、幼児センターから高校まで成長段階に合わせて目標を設定し、15年一貫の森林環境教育に取り組んでいます。幼児センターではほぼ月に1回、小学生から高校生までは年に1回、プログラムを実施しています。プログラムの内容は、森林環境教育プログラム LEAF に基づいて企画・実施しています。

### 下川町の森林環境教育の目標

- ・身近な自然における学びや楽しみを通じて人間的な成長を育む。
- ・地域の資源である森林を活かす仕事について理解を深める。
- ・森林の役割や地域の取り組みについて考え、持続可能な社会に向けて自ら行動できる人を育む。

### LEAF

LEAF は北欧発祥の森林環境教育プログラムで、現在 21 カ国で取り組まれ、日本では NPO 法人 FEE Japan が活動を推進しています。人間が持続可能な生活を送る上で森林が重要な役割を担っていることを子どもたちに知ってもらい、学んでもらうことをビジョンに掲げています。プログラムは、活動を中心とした参加型で、森林の文化的、生態学的、経済的、社会的な役割を考えさせるもので、“Clever Question, Good Decision” を大切にしています。

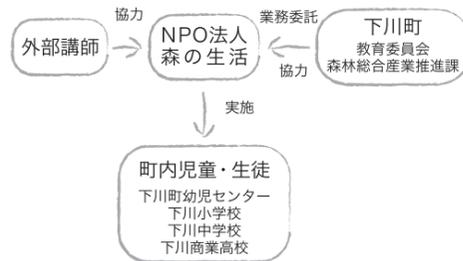


### プログラムの評価・改善

プログラム実施後に先生方へのアンケートを行い定量的な評価を行うとともに、関係機関（教育機関、教育委員会、役場）との「下川町森林環境教育関係者打ち合わせ会議」を2回実施し、情報共有と意見交換を行い、プログラムの改善に努めています。

設問 * 5段階評価で、1が低い評価、5が高い評価。	平均値	
	2016 (N=23)	2017 (N=23)
A. 活動の目標が事前に共有できていましたか。	4.4	4.3
B. 活動の目標が達成できましたか。	4.3	4.2
C. 子どもたちにとって興味を持って取り組める内容でしたか。	4.4	4.5
D. 子どもたち自身の気づきや学びを尊重した内容でしたか。	4.1	4.2
E. 森の生活との連携の意義を感じる内容でしたか。	4.2	4.4
F. 準備や実施は負担に感じませんでしたか。（*負担に感じなかったが5）	4.3	4.3
G. 安全に活動できましたか。	4.6	4.4
H. 学校で学習している関連単元の理解を深めることに役立ちましたか。	4.3	4.2

### 実施体制



### 2017年度実施プログラム

#### 下川町幼児センター 森のあそび

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 4月 白樺樹液の採取      | 9月 秋の遠足、落ち葉集め、焼き芋 |
| 5月 下川町植樹祭、ヨモギ摘み | 10月 自然散策          |
| 6月 春の遠足         | 1月 雪山でそりすべり       |
| 7月 自然散策         | 2月 雪山でそりすべり       |
| 8月 白樺のしおりづくり    | 3月 修了式（スライドショー）   |



### LEAFの6つのSTEP

**STEP 2**  
自然を体感して気づく

**STEP 3**  
環境のしくみを理解する

**STEP 4**  
人間と自然の相互作用を理解する

**STEP 5**  
環境問題に自分なりの判断を下す

**STEP 6**  
未来に対して責任を持つ

### 下川小学校 森林学習

- 1年生 お気に入りの木を見つけよう**  
身近な自然を体感することで地域の自然に対する愛着を育む
- 2年生 木の図鑑を作ろう**  
図鑑作りを通して多種多様な樹種があることを知り、森林への興味・関心を高める
- 3年生 森の生き物を調べよう**  
虫や動物、きのこ、樹木などの生態を知ることで森林の循環のしくみについて理解を深める
- 4年生 森づくりについて学ぼう**  
植樹祭を通して木を植え、育てる活動への興味・関心を高め、下川町の循環型森林経営について理解する
- 5年生 木材の活用法について学ぼう**  
森林調査や伐採体験、工場見学を通して森林の育成や活用に携わる人々の取組について興味・関心を高め、人間と自然の相互作用について理解する
- 6年生 木材製品と生活について考えよう**  
樹種や木材を詳しく知り、マイ箸づくりを通して木材製品への関心を高め、自分の生活の中でできる選択について考える



### 下川中学校

- 1年生 「炭焼き学習」オリエンテーション**  
環境未来都市である下川町の自然環境と自分たちとの関係性を認識し、炭焼き体験の際につながりを意識して行動できるようにする。炭焼きの歴史や方法について理解する
- 2年生 職場体験学習**  
下川町の森に関わる仕事の体験を通して循環型森林経営の理解を深める
- 3年生 郷土学習**  
環境未来都市である下川町の自然環境と自分たちとの関係性を認識し、つながりを意識して行動できるようにする。



### 下川商業高校

- 1年生 下川商業高校 × 士別翔雲高校キャンパス交流**  
下川の取り組んでいる森林の利活用法について理解を深める。下川商業高校生と士別翔雲高校生の交流を深める。
- 2年生 商品開発**  
地域資源（下川町産の広葉樹材）を使用した商品開発を通して森林の経済的価値を理解する
- 3年生 商品販売**  
2年次に製作した商品の販売を通して森林の経済的価値及び循環型森林経営の理解を深める



### LEAFの6つのSTEP

**STEP 1**  
野外で楽しく遊ぶ

プログラム例：小学5年生「木材の活用法について学ぼう」

単元の目標：森林調査や伐採体験、間伐材が活用される工場や施設の見学を通して、森林の育成や活用に携わる人々の取組について興味・関心を高め、人間と自然の相互作用について理解する。

9/26 事前学習 <下川小学校5年生教室>  
人工林の育成の流れについて確認

10/3 現地学習  
<溪和森林公園>  
伐採体験  
林業機械の紹介  
伐採された木の下川での活用法について説明  
質問タイム

<木質原料製造施設>  
丸太がチップになる様子を見学

<小学校前 木質バイオマスボイラー施設>  
チップが燃やされ、エネルギーになる様子を見学  
小学校の熱供給とのつながりを知る

10/10 事後学習 <下川小学校5年生教室>  
森林新聞づくり  
\*小5社会『わたしたちの生活と森林』の単元と関連させ、  
学校教育の学習内容を深めることにもつながりました。



取り組みを世界にご紹介いただきました！

日本の持続可能な社会に関する情報を英語で世界に発信する活動に取り組みされているジャパン・フォー・サステナビリティさんが、下川の森林環境教育の取り組みを詳しくご紹介してくださいました。

(参考：  
[https://www.japanfs.org/en/news/archives/news\\_id035978.html](https://www.japanfs.org/en/news/archives/news_id035978.html))



担当スタッフより



藤原 佑輔

木の名前や木材の活用法の質問に答えられる子が多く、幼児センターからの継続的かつ段階的な学習の積み重ねの効果を感じました。一方、野外活動における安全の確保や体力面への配慮、普段の学習との関連の強化が課題となりました。2018年度は、子どもたちがより楽しみながら、自ら興味を持ち、発見し、考えるプログラムを提供したいと考えています。



活動報告  
森林体験事業



森林体験・視察プログラム

延べ 155 人の方々に 31 件のプログラムを提供しました。

下川を訪れる方々に気軽に森や自然と接する機会を提供し、森のある暮らしをお手伝いしています。

**季節の森歩き**  
季節ごとに魅力たっぷりの下川の森をゆったり散策します。



**森の精油づくり**  
森でトドマツの枝葉を採り、エッセンシャルオイルを作ります。



**ムーンウォーク**  
満月の夜の森をスノーシューで歩きます。五味温泉の入浴券付き。



オーダーメイドのプログラム

延べ 580 人の方々に 17 件のプログラムを提供しました。

自治体・企業・大学などの他団体と連携し、目的に合わせてじっくりと森で学ぶ機会を提供しています。

**子ども交流事業**  
下川の小学生 5,6 年生を対象に、横浜市戸塚区、京都府京丹波町、岐阜県御嵩町の小学生との交流体験をコーディネートしました。

**コープさっぽろ 下川森の交流会**  
コープさっぽろ旭川地区の組合員 16 名を対象に、下川町の人々の生活と森林のつながりについて理解を深めるプログラムを提供しました。

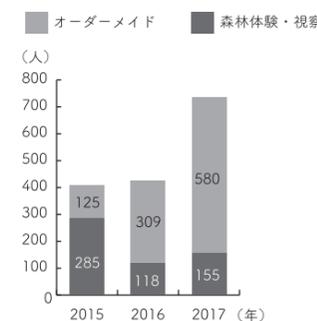
**御嵩町環境都市交流体験プロジェクト**  
岐阜県御嵩町の中学生 6 名を対象に、下川町の森林産業について学ぶプログラムを実施しました。



**名寄市立大学社会保育学科 自然保育実践実習**  
保育士の卵である名寄市立大学社会保育学科の学生たちが自然保育の実践フィールドとして美桑が丘を利用し、火起こしやレクリエーション、キャンプなどを行いました。



参加者数の推移



2017年5月のホームページリニューアル以降、体験の個人申込みが増加し（昨年度20件→今年度31件）、名寄大学社会保育学科との連携も継続・強化させていただいた結果、多くの方にプログラムを提供することができました。2018年度は、プログラムを見直すとともにヨックルとのセット割引などを掲載した新たなリーフレットを主に都市部の方に配布し、利用者の増加に努めたいと思います。

担当スタッフより



藤原 佑輔



## 活動報告

# 地域間交流施設「森のなかヨックル」 管理運営事業

1,604 人の方々にご利用いただきました。

指定管理者として、地域間交流施設「森のなかヨックル」の管理運営を行っています。

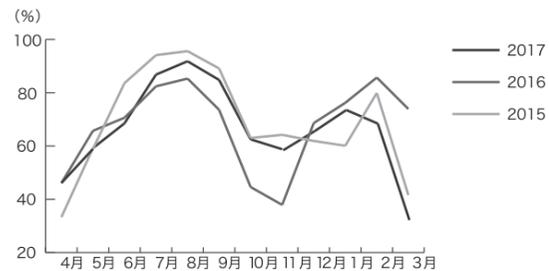
下川町地域間交流施設森のなかヨックルは、恵まれた自然環境を背景に、各種体験活動の場を提供し、都市住民と町民との交流を促進、地域の活性化を図ることを目的として、2006年に下川町によって設置されました。2009年4月1日からは、NPO 法人森の生活が指定管理者としてヨックルの管理運営を行っており、森の生活が従来から行っていた都市向けの森林体験交流事業をより発展させ、宿泊とあわせて多様なプログラムを提供し、森林のまち下川町の交流拠点となることを目指しています。



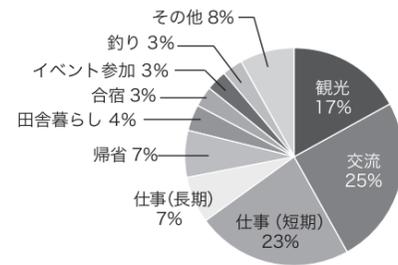
自炊可能なコテージ型の交流施設で、A棟1棟(10名定員)、B棟10棟(4名定員)、の合計11棟からなります。市街地にも近く、自炊設備も整っているため、下川に暮らしているような気分で滞在できる施設となるよう管理運営を行っています。

お客様の利用目的は観光・交流・仕事・帰省・合宿・イベント参加など多岐に渡っています。どのような目的で宿泊された方にも地域の魅力を伝えることが、地域間交流施設としての役割であり、持続可能な地域づくりにつながります。年々、お客様と地域の人とのつながりや、お客様同士の交流が増えてきています。2017年度も地域とのつながりや交流の場となるような取り組みを実施しました。

### 2015~2017 年度 稼働率



### 滞在目的



### ヨックルガーデン

ヨックルに併設された畑で、お客様にご利用いただいています。地域のヨックルガーデンサークルのメンバーと一緒に運営し、農業や化学肥料を使わずに作物を育てています。ガーデンを楽しみにされているお客様も多く、滞在中は畑作業や収穫を楽しんでいただいています。2017年度は、昨年度に引き続き利用しやすく管理しやすいガーデン整備を実施しました。利用されるお客様が増えてきたため、不特定多数の人で利用するのに適した作物選びや、利用のルール共有方法などが課題となってきています。



ヨックルガーデン収穫祭  
お客様とガーデンサークルのメンバーと一緒に収穫し、バーベキューをして秋の爽りのお祝いをしました。

### 森から生まれた製品のある部屋づくりの推進

ヨックルでは、下川の森から生まれた製品をお客様に実際に使っていただくことができる部屋づくりを推進しています。2017年度は、木工作家さんのご協力をいただき、下記の製品を新たにヨックルに設置することができました。

#### 箸 (案山子の箸屋 下川)



案山子の箸屋の遠藤さんは、下川町で間伐材を使った箸作りや箸作り体験を実施しています。今回 70膳のうち、20膳はご厚意でご寄付いただきました。

#### ベンチ (森のキツネ 下川)



森のキツネの河野さんは 2016 年に下川に移住された木工作家さんです。森の生活の広葉樹材を使って制作されたベンチを A 棟の玄関に設置しました。

#### 壁掛け時計 (クラフト蒼 下川)



クラフト蒼の白田さんは、2015 年に下川に移住された木工作家さんです。今回は下川産の材のみで作成していただきました。各棟の居間に森らしさを演出することができました。

#### トイレトーパーホルダー (auau 函館)



auau の運野さんは函館の木工作家さんで、森の生活の広葉樹材を使ってトイレトーパーホルダーを制作していただきました。各パーツに木の名前が刻印されていて、樹種を学ぶこともできます。

### ヨックル朝食セットの試験販売

期間限定の企画でヨックルの朝食セットの販売を実施し、合計 31 セットのご利用がありました。セット内容は町内のあべ養鶏場さん、及川農園さん、矢内菓子舗さんと一緒に考案しました。初めての試みでしたが、利用された方からはご好評をいただき、町内の生産者さんと連携したことは、今後のヨックルの事業展開にも多くのヒントをいただく貴重な機会となりました。



【朝食セットの内容】  
酵素卵(あべ養鶏場)、フルーツマト(及川農園)、パン(矢内菓子舗)

### お客様の声

アンケートコメント欄より抜粋

#### 〈良いところ〉

- ・町中にあるのが良い
- ・きれい、安い、設備が充実している
- ・自宅のようにくつろげる
- ・ヨックルガーデンが素敵

#### 〈改善してほしいところ〉

- ・トイレをウォッシュレットにしてほしい
- ・予約が取りにくい、増棟してほしい
- ・インテリアが統一感がない。もっと木の町をアピールしても良いのでは？

#### 〈朝食セットについて〉

- ・とても美味しかった
- ・地元の飲み物があるとおいしい
- ・もう少し下川ならではの感があるとおいしい

ヨックルの魅力は設備が整った清潔な施設と利用しやすい料金、夏場はヨックルガーデンが利用できること、そして下川という町にあるということだと思います。下川の町にあるということが、まだまだ生かされていないと感じています。2017年度試験的に実施した朝食セットの販売は、町内の生産者さんから声をかけていただいて実現しました。このような取り組みをもっと広げ、町の魅力を伝えられる宿にしていきたいと思っています。

担当スタッフより

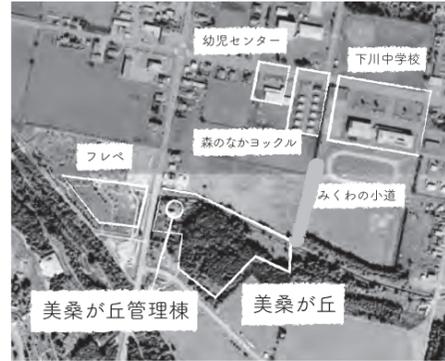


成田 菜穂子

延べ 2,614 人の方々にご利用いただきました。

指定管理者として、美桑が丘の管理運営を行っています。

美桑が丘は、「各種体験学習、ふれあいや環境関連資料等の展示・催しを通じ、森林文化の創造を図る」という目的のもと、下川町によって設置されました。2012年度からは森の生活が指定管理者となり、下川町中心部近くにある放置されていた雑木林を「美桑が丘」として人々が集うことのできるフィールドに整備するところから活動を始めました。美桑が丘の森は野外活動やイベントのフィールドとして、管理棟は屋内活動やミーティングのスペースとして利用することができます。



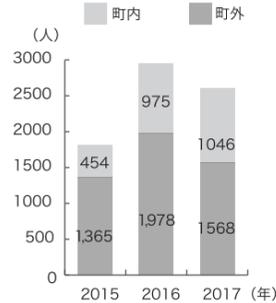
美桑が丘における市民活動の経緯

2010年度、下川町が美桑が丘の用地を取得。2012年度、森の生活が指定管理者に決定。2013年度には、森の生活主催で毎月一度、誰もが美桑が丘で自由に過ごすことのできるイベント「みくわの日」をスタート。地域の人々と協働で美桑が丘の場づくりについて考える話し合いも実施しました。その後、徐々に利用者が増え、美桑が丘でより活動がしやすくなるしくみ「みくわクラブ」が生まれました。また、地域の人々との話し合いは、試行錯誤を経て、年2回の「みくわミーティング」となり、初めは森の生活主催で実施していた「みくわの日」も市民グループが運営するようになりました。2017年度は、前年度に引き続き道産子馬の放牧を行ったほか、利用者とともに薪小屋と東屋を建設しました。



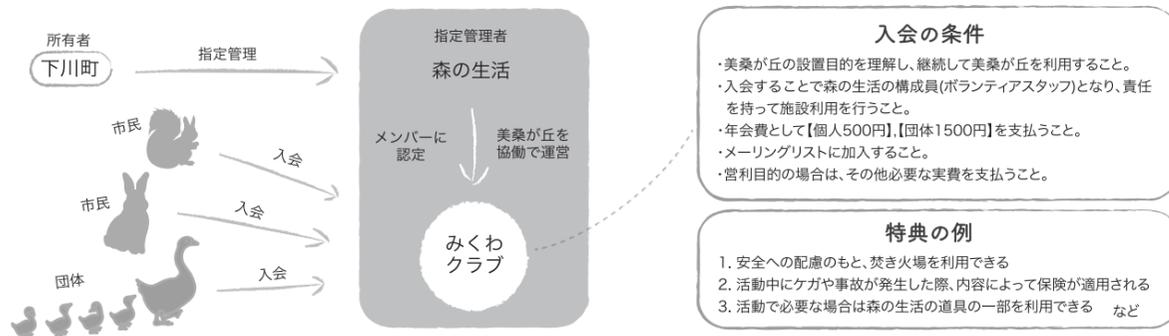
みくわミーティング

利用者数の推移



みくわクラブ

継続して美桑が丘の場づくりに関わりたい利用者が、より活動しやすくなるしくみです。「森の生活の構成員となり、責任を持って施設利用を行うこと」を条件に指定管理者の構成員として主体的に活動をしやすくなる様々な特典を受けることができます。



みくわの日 (みんなのたまり場グループ)

月に1回、子どもからお年寄りまでみんなが美桑が丘で自由に過ごせる場を地域の方々とともにつくっています。



利用者の声

みくわの日に携わるようになって数年。町内外から様々な人達が遊びに来てくれて嬉しい限りです。ただ、自分の中で「みくわの日を運営する」のが主目的になってきているのも事実。この森でこんなことやりたい！やってみたい！を実践できる場にしていきたく、自分がそうあらなければならないと、年次報告書を書いていて思い出しました。私が一番楽しんでいる、そんなみくわの日でありたいです。

みんなのたまり場グループ  
奥崎裕子

薪小屋と東屋作り (森の生活&利用者)

利用者の要望を受けて焚き火場のそばに薪小屋と東屋を建設しました。より野外活動がしやすくなったと好評です。



道産子馬の放牧 (利用者)

町民が飼育している道産子馬はなちゃんを美桑が丘で林間放牧しました。放牧跡地を、畑として利用する予定です。



森ジャム (森ジャム実行委員会)

2017年で4度めとなる町民主催の森でつながるイベントです。毎年7月に実施され、森のマーケット会場として利用されています。美桑が丘の利用者も「みくわ共和国」として参加しています。



小さな里山づくり (22世紀コミュニティ研究会)

美桑が丘の一部で、里山暮らしの実践をしています。

ツキイチ! ボードゲーム交流 (ボードゲーム交流会)

月に1回、美桑が丘管理棟でボードゲーム会を開催し賑わっています。

小さな映画会 (小さな映画会)

不定期で、美桑が丘管理棟で映画会を開催しています。

そのほか、森の生活が提供する森林環境教育や体験プログラム、子ども交流、研修などのフィールドとして活用しています。

今年度は、日当たりを改善して様々な草花や大きな木が育つよう、みくわクラブのメンバーと一緒に枝打ちや択伐、笹刈りと動物とのふれあいを兼ねた道産子馬の林間放牧などの森づくりを行ったほか、一般の方にもご参加いただき、森を整備した際に生まれる薪(まき)を保管する薪小屋や雨風を防ぎ野外活動がしやすくなる東屋を建てるなど、少しずつ整備を進めることができました。一方、引き続き利用者の減少や固定化が課題となっているため、2018年度は、利用者との森づくりをさらに進めるとともに、利用者拡大に向けて情報発信の強化や敷地内の案内板整備に取り組みたいと考えています。

担当スタッフより



藤原 佑輔

## ローカルベンチャーの推進

地方の資源を活用し、新たな価値を生み出す事業を創造する「ローカルベンチャー」の推進に取り組み、全**9**回のローカルベンチャーラボに加え、**8**件の関連イベントに協力を行いました。延べ**200**名以上のイベント参加、**1**人の移住・起業を生み出しました。

下川町産業活性化支援機構と森の生活がローカル事務局を共同で担い、NPO 法人 ETIC. との連携のもと、森林をはじめとする地域資源を生かして、地域に仕事を生み出す人を育てるしくみづくりに取り組んでいます。

### ローカルベンチャー推進協議会とは

地方創生に取り組む8自治体が連携し、人材確保や事業化支援等の面で連携しながら、5年間で総額50億円の経済効果を目指す「ローカルベンチャー推進協議会」が2016年9月1日に発足。下川町も連携自治体として立ち上げに関与しました。協議会の事務局は、2010年から森の生活とも関わりのあるNPO法人ETIC. が担い、産業活性化支援機構と森の生活が共同で担う下川のローカル事務局とも連携しながら取り組みを進めています。



2017年からは、ローカルベンチャーを担う人材を首都圏で育成するプログラムづくりや、地域で起業などをする人材のための支援チームの形成などに取り組まれました。

### 開催イベント一覧

下記イベントの実施をはじめ、地域での起業や事業連携に関心のある人々や、支援者とのネットワーク構築に取り組みました。

- ・地域で“好き”を仕事にするには？循環する森林の町・北海道下川町のローカルベンチャー「シモカワベアーズ」という働き方・暮らし方 (8月8日 @NPO 法人 ETIC. イベント会場)
- ・日本全国！地域仕掛け人市 (9月30日 @EBiS303)
- ・北海道ローカルベンチャー共創ワークショップ  
「ローカルと挑戦者をむすぶ、最初の一歩のはじめかた」 (2月4日 @Ten to Ten Sapporo Station)
- ・森となりわいを創るナイト (2月11日 @リトルトーキョー)
- ・ローカルベンチャーイニシアティブ (2月24日 @ 永田町 GRID)



## プログラムへの参加を通じて下川に移住した方の声

地方での事業構想を練るプログラム「ローカルベンチャーラボ」(主に東京で開催)のコースファシリテーターとして協力を行いました。プログラムの参加者である山田さんが、「シモカワベアーズ」の起業枠に応募し、採用に至り、下川に移住しました。起業家向けに地域おこし協力隊制度を活用する、下川町として初めての取り組みです。

事業を興したいと漠然な思いを持ち参加したローカルベンチャーラボで、森の生活の麻生さんや、下川町で既に挑戦している方々、挑戦をサポートする方々と出会い、地域への移住や起業へのハードルが下がりました。そして、「シモカワベアーズ」への応募をきっかけに、下川町で挑戦しよう決めました。  
私が取り組むのは、町に出没するエゾシカの捕獲～販売までの一連のビジネスです。全国的に鹿は害獣として、駆除の対象ですが、折角、命を頂くのだから、余すところなく使って、彼らの命を無駄にしないように、下川町の森がくれた大切な資源として扱っていきたいと思っています。



山田 泰生さん

## 小規模多機能自治の推進

小規模多機能自治合同研修会 in 北海道を実施し、下川町および**3**自治体から**34**人が参加。小規模多機能自治のしくみや事例について学びました。

地域の困りごとを住民みずから解決する「小規模多機能自治」を推進するために、自治体間で学び合う場を設けました。

### 「小規模多機能自治合同研修会 in 下川」の開催



下川町は、小規模多機能自治推進ネットワークの北海道ブロック幹事自治体を務めています。同ネットワークの会員である、士別市、ニセコ町のほか、北見市、そして地域自治に関心のある住民などが、ともにまなび会いました。下川からは及川農園から及川泰介さんに発表いただきました。

過疎化が急激に進行する地域で、多くの方がずっと楽しく暮らせるようにするためには、今の自分の周りだけでなく、未来の地域を見通して、備えなくてはいけないと思います。どうせやるなら、楽しみながらやっていけるのが一番。「自治」とか「ベンチャー」とか、カタさやトガリのある言葉かもしれませんが、それらを当たり前前に担っていく人を増やすための取り組みだと思っています。

担当スタッフより



麻生 翼

森のめぐみを  
届ける事業



## 活動報告 森の製品開発事業

地域内で有効利用されていなかった広葉樹丸太 **30.9m<sup>3</sup>** を購入し、製材・乾燥したほか、木工用材や加工製品延べ **35** 件の販売を行いました。

有効活用されていない広葉樹材を、少量・多品目の木材流通システムを構築することで、町内外の作り手の方々に顔の見える木材として供給しています。

### 少量・多品目の顔の見える木材流通システム

木工用の材料として広く利用されている広葉樹。しかしながら、国産広葉樹材の約 8 割がチップにされている一方で、その多くを外国からの輸入に頼っています（日本有数の家具産地である旭川でも、使用する材料のうち 8-9 割は外国産材だそうです）。広葉樹資源が豊富な天然林の蓄積量は、1990 年以降、回復傾向にあります。ミズナラ、タモといった木工として利用価値の高い樹種が多いものの、例に漏れずその多くはチップにされています。この状況を生む背景には、広葉樹は出材量が少ないため、原木車による運送コストに見合うだけの量を確保することが難しいという課題があります。



有効活用されていなかった地域の広葉樹材を活用するために、下図のように、少量の広葉樹でも木工用材として供給することのできる、顔の見える木材流通のしくみを構築しました（造材では下川町森林組合、越智重機林業（株）、運材では下川運輸（株）、製材では山本組木材（株）にご協力いただきました）。



森林の町下川で育った広葉樹を、自然乾燥に近い低温乾燥で、時間をかけて含水率を落とし、木材の持つしなやかさ、艶やかさを活かした提供をしています。使ってくださる木工作家さん、建築家、デザイナーの方々から、「野菜の直売みたいに、産地のわかる木材はお客さんから喜ばれる。顔の見えるモノを使いたいと願う人が増えている」「低温乾燥材は自然塗料との相性がいい」といった感想をいただいています。少しずつゆっくりと、顔の見える木材流通が理解され、共感が広がってきたのを感じています。下川広葉樹を暮らしに取り入れてくれた方々が、下川の森に興味を持ってきて、いつか森さんぽやモノ作りの体験にいらしていただけたら、と願いつつ、使ってくださる方々の気持ちに寄り添った提供をしていきたいと思っています。

担当スタッフより



谷目 基

## 活動報告 森の直売事業

北大マルシェと連携し、下川の森から生まれた商品を物販コーナーに設置しました。

北海道大学構内の百年記念会館内にオープンした「北大マルシェ Café & Labo」。北海道の一次産業の価値を伝える場としてオープンしたお店の内装には下川産の木材がふんだんに使われています。物販コーナーには、森の生活の広葉樹木材を始め、下川の森から生まれた製品を取り扱っていただきました。



## 森の生活の SDGs に関する基本方針

SDGs (Sustainable Development Goals [持続可能な開発目標]) は、2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193 国が 2016 年～ 2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標です。下川町では SDGs を踏まえた「2030 年のありたい姿」を策定し、総合計画への反映に取り組みなど、自治体としても SDGs の達成の寄与に取り組んでいます。森の生活の SDGs に寄与する取り組みをまとめました。

SDGs 17Goals	取り組み
1. 貧困をなくそう あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ	主に子どもたちに対して、相対的貧困から引き起こされる、体験活動の質の差(体験格差)の解消のため、学内での森林環境教育や、学外における美桑が丘をフィールドにした月に1度のみくわの日や子ども交流事業の実施において、プログラムの質の向上としくみの継続化・発展に取り組めます。
2. 飢餓をゼロ 飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する	バーマカルチャーの考え方を参考に無農薬で栽培しているヨックルガーデンを主なフィールドとして、ヨックル滞在者やヨックルガーデンサークルのメンバーが野菜を栽培・収穫できる機会をつくるとともに、地域の農家等と連携した朝市の実施を検討し地産地消を促すことで、食育の場づくり、地産地消の推進に取り組めます。
3. すべての人に健康と福祉を あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する	もりさんぽや森林体験プログラムを通じて、地域住民および都市住民が気軽に森林散策できる機会をつくるとともに、ヨックルを拠点としたテレワークの推進や森林を体験する企業研修等を通じて、ストレスフルな環境下にいる人々のメンタルヘルスの増進に企業と連携して取り組めます。
4. 質の高い教育をみんなに すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する	子どもたちに対しては、15年一貫の森林環境教育、子ども交流事業、みくわの日を通じて、自然や他地域との交流の機会づくりに取り組めます。大人に対しては、もりさんぽや各種体験プログラムを通じて、森林に触れ、森林の役割について理解を深められる機会をつくります。
5. ジェンダー平等を実現しよう ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る	年に1度は労働者の労働環境の改善に向けて話し合う機会をつくり、フレックスタイム制の導入など各スタッフの生活様式に合わせて柔軟に働ける環境づくりに取り組んでいます。理事の女性比率は40%(5人中2人)です。
6. 安全な水とトイレを世界中に すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する	森林環境教育プログラムの中で、森林の持つ水源涵養機能について理解を深める機会づくりに取り組めます。また、森の生活の管理運営する施設(美桑が丘管理棟、地域間交流施設「ヨックル」)において、館内に設置する洗剤類については合成洗剤を避け、清掃においても、せっけん洗剤、重曹、クエン酸を使用します。
7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する	森林環境教育プログラムや視察研修において、下川の取り組み木質バイオマスエネルギーの活用について理解を深める機会づくりに取り組んでいます。また、美桑が丘管理棟での薪ストーブ使用、ヨックルでのレンタルサイクルなど、省エネルギーを促す他、ヨックルの熱源を、隣接する中学校・幼児センターの木質バイオマスボイラーを利用することで木質化を促す働きかけを行います。また、事業活動で使用する石油由来のエネルギー使用を削減するために、モニタリングし、年次報告書にて公表します。
8. 働きがいも経済成長も すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク(働きがいのある人間らしい仕事)を推進する	年に1度は労働者の労働環境の改善に向けて話し合う機会をつくり、フレックスタイム制の導入など各スタッフの生活様式に合わせて柔軟に働ける環境づくりに取り組んでいます。事業だけでなく組織基盤についても議論を行い、スタッフ間で中期目標を共有しています。
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう 強靱なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る	森林を生かしたローカルベンチャーの推進、小規模多機能自治の推進を通じて、持続可能な農山村地域のモデルづくりに取り組めます。
10. 人や国の不平等をなくそう 国内および国家間の格差を是正する	主に子どもたちに対して、相対的貧困から引き起こされる、体験活動の質の差(体験格差)の解消のため、学内での森林環境教育や、学外における美桑が丘をフィールドにした月に1度のみくわの日や、子ども交流事業の実施において、プログラムの質の向上としくみの継続化・発展に取り組めます。
11. 住み続けられるまちづくりを 都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする	森林を生かしたローカルベンチャーの推進、小規模多機能自治の推進を通じて、持続可能な農山村地域のモデルづくりに取り組めます。
12. つくる責任 つかう責任 持続可能な消費と生産のパターンを確保する	森の生活の管理運営する施設(美桑が丘管理棟、地域間交流施設「ヨックル」)において、館内に設置する洗剤類については合成洗剤を避け、清掃においても、せっけん洗剤、重曹、クエン酸を使用します。また、森林体験プログラムではチェーンソーではなく手のこを使用し、ガソリンの使用を抑えます。
13. 気候変動に具体的な対策を 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る	森林環境教育プログラムや視察研修において、下川の取り組み木質バイオマスエネルギーの活用について、環境・経済・社会の面から理解を深める機会づくりに取り組んでいます。また、美桑が丘管理棟での薪ストーブ使用、ヨックルでのレンタルサイクルなど、省エネルギーに動ける他、ヨックルの熱源を、隣接する中学校および幼児センターの木質バイオマスボイラーを利用することで木質化する働きかけを行います。また、現状の石油由来のエネルギー使用を削減するために、モニタリングし、年次報告書にて公表します。
14. 海の豊かさを守ろう 海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する	活動拠点である下川町が天塩川水系の源流域に位置する認識を持ち、森林環境教育プログラムの中で、森林の持つ水源涵養機能について理解を深める機会づくりに取り組めます。また、森の生活の管理運営する施設(美桑が丘管理棟、地域間交流施設「ヨックル」)において、館内に設置する洗剤類については合成洗剤を避け、清掃においても、せっけん洗剤、重曹、クエン酸を使用します。
15. 陸の豊かさを守ろう 陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る	森林のもつ生態学的・社会的・経済的・文化的な役割について、教育、視察研修、各種体験プログラムを通じて理解を深める機会づくりに取り組めます。また、主に広葉樹資源について、持続可能な管理手法について検討する機会づくりに取り組めます。
16. 平和と公正をすべての人に 持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する	一人一人が地域づくりの担い手として主体的に考え動くことのできるよう、スタッフおよび関係者に、活動に関する情報を積極的に開示し説明責任を果たすとともに、参画を促す取り組みを行います。
17. パートナリシップで目標を達成しよう 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化	事業の推進にあたっては、NPO、行政、教育機関、企業、大学、市民など、多様な関係者と協働して取り組めます。



## 会計報告

活動計算書 2017年4月1日～2018年3月31日

(単位：円)

I 経常収益	
会費	175,000
寄付金	218,000
事業収益	23,281,673
受託事業収益	12,930,607
その他収益	136,905
経常収益 計	36,742,185
II 経常費用	
事業費	
人件費	13,915,890
その他経費	15,490,202
事業費 計	29,406,092
管理費	
人件費	5,124,872
その他経費	274,602
管理費 計	5,399,474
経常費用 計	34,805,566
当期経常増減額	1,936,619

税引前当期正味財産増減額	1,936,619
法人税、住民税及び事業税	191,600
当期正味財産増減額	1,745,019
前期繰越正味財産額	16,075,092
次期繰越正味財産額	17,820,111

## 資産貸借表

2018年3月31日現在

(単位：円)

I 資産の部		II 負債の部	
流動資産		流動負債	
(現金・預金)		買掛金	286,059
現金	1,229,269	未払金	2,811,287
普通預金	11,623,422	預り金	51,998
現金・預金 計	12,852,691	未払法人税等	191,600
(売上債権)		未払消費税	553,900
売掛金	7,235,853	流動負債 計	3,894,844
売上債権 計	7,235,853		
(有価証券)		負債 合計	3,894,844
有価証券	60,000		
有価証券 計	60,000	III 正味財産の部	
(棚卸資産)		正味財産	
棚卸資産	1,421,803	前期繰越正味財産額	16,075,092
棚卸資産 計	1,421,803	当期正味財産増減額	1,745,019
(その他流動資産)		正味財産 計	17,820,111
前払費用	30,000		
その他流動資産 計	30,000	正味財産 合計	17,820,111
流動資産 合計	21,600,347	負債・正味財産 合計	21,714,955
固定資産			
(有形固定資産)			
一括償却資産	94,608		
有形固定資産 計	94,608		
(投資その他の資産)			
出資金	20,000		
投資その他の資産 計	20,000		
固定資産 合計	114,608		
資産合計	21,714,955		



## 理事・スタッフ紹介



代表理事  
麻生 翼



理事  
児玉 光



理事  
普久原 涼太



理事  
黒井 理恵



理事・事務局長  
『森のなかヨックル』  
管理運営  
成田 菜穂子



森林体験  
森林環境教育  
美桑が丘管理運営  
藤原 佑輔



森の製品開発  
谷目 基



森林環境教育  
佐藤 咲子



総務  
児玉 こずえ



『森のなかヨックル』  
管理運営  
森づくり技術指導  
中山 誠一



『森のなかヨックル』  
管理運営  
白川 百合子



『森のなかヨックル』  
管理運営  
小日向 妙子

## 団体概要

名称	特定非営利活動法人 森の生活
代表理事	麻生 翼
理事	児玉 光、普久原 涼太、黒井 理恵、成田菜穂子
幹事	渡邊 大介
設立	2005年11月
会員	37名(正会員17名・賛助会員20名) 法人賛助会員7社 ※2018年10月時点
住所	〒098-1204 北海道上川郡下川町南町477番地
電話	01655-4-2606
FAX	01655-6-7007

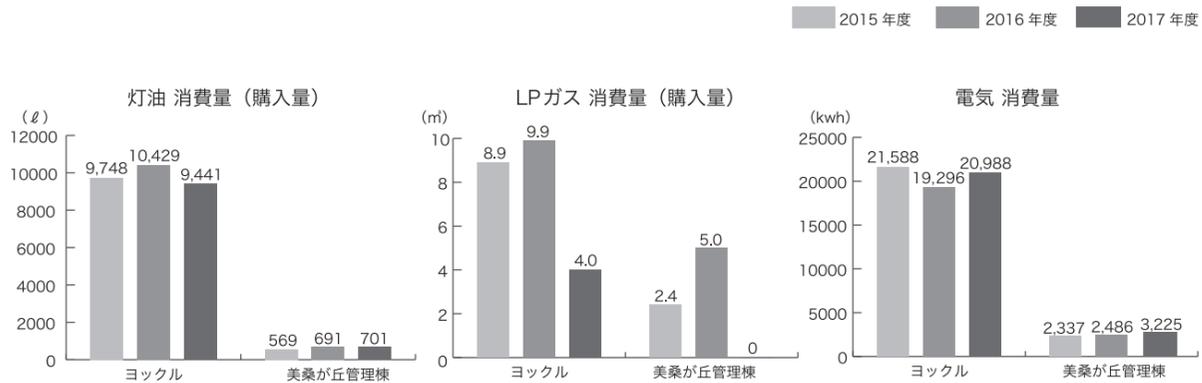
## 法人賛助会員団体(五十音順)

- ・株式会社ウェルトレーディングサービス
- ・株式会社キートス
- ・斎藤木材株式会社
- ・株式会社サンテック
- ・空知単板工業株式会社
- ・日本ウッドコーポレーション株式会社
- ・有限会社 北工加工



## エネルギー消費量

指定管理者として施設「地域間交流施設 森のなかヨックル」「美桑が丘管理棟」の管理運営を行っています。事業活動に伴うエネルギー消費削減に努めるため、消費量についてモニタリング・公開しています。



## 森の生活年表

- 1997年 移住者を中心とした団体「さーくる森人類」発足。森づくりや森林・林業体験事業などを実施。
- 2002年 下川産業クラスター研究会の「自然療法プロジェクト」が森林療法をはじめとする自然療法の研究を開始。
- 2005年 「さーくる森人類」を母体としてNPO法人森の生活設立。代表に奈須憲一郎が就任。森林療法を事業の柱の1つに据え、森を活かした体験プログラムやツアーの提供を開始。
- 2006年 「下川町幼児センター こどものもり」の児童を対象にした森の中での保育活動「森のあそび」を開始。
- 2008年 下川町森林組合から移管を受け、トドマツ精油製造販売事業を開始。
- 2009年 指定管理者として「地域間交流施設 森のなかヨックル」の管理運営を開始。幼児・小・中・高校一貫の森林環境教育事業を開始。
- 2012年 精油製造販売事業担当が新たに立ち上げた「株式会社フブの森」にトドマツ精油製造販売事業を移管。
- 2013年 指定管理者として「美桑が丘」の管理運営を開始。事務所を美桑が丘管理棟に移転。代表理事に麻生翼が就任。
- 2015年 有効活用されていなかった広葉樹材を活用するために小規模多品目の木材流通事業を開始

## 森の生活の 中期3ヵ年（2018-2020年）目標

森を活かし、生き生きと暮らす人を増やすために  
「森のうずしお」をつくる。

### 1. 森や木材と関わる機会をつくります。

web、イベント、体験プログラム、製品を通じて、「森と関わることに興味はあるけどきっかけがない」という人たちに、森や木材と関わる機会をつくります。

### 2. 自然・地域の人々との関係性をつなぎます。

私たちのサービス・製品を通じて、下川の森林をはじめとする自然や、地域の人々との関係性をつなぎます。

### 3. 自ら生き生きと暮らすことができるよう、促します。

築いた関係性をいかして、自分らしく森や地域と関わることで、自ら生き生きと暮らすことができるよう促します。

### 4. 1～3の循環（森のうずしお）を生み出します

そのような人々が増えることで、森林や地域に関心を持つ人がさらに増え、さらに1→2→3→1→2…と続く循環を生み出します。



森の生活では活動をご支援して下さる方々を募集しています。  
HPからお申し込みください。

#### 【正会員】

年会費 5,000 円（個人のみ）

森の生活の総会議決権を持つ「活動の担い手」として、森の生活の運営や活動方針の検討に関わってくださる方々。

#### 【ファンクラブ会員（賛助会員）】

年会費 3,000 円（個人） 10,000 円（法人）

下川や森の生活を応援して下さる「活動の応援団」の方々。

下記口座への寄付も受け付けております。お気づかりしたご寄付は活動に大切にさせていただきます。

#### 【寄付・お振込先】

銀行振込

北星信用金庫下川支店 普通口座 1018801

特定非営利活動法人 森の生活 代表 麻生翼

ゆうちょ銀行 振替口座

02760-6-41851 特定非営利活動法人 森の生活

（他行から振込）二七九店 当座：0041851



森の生活

<https://morinoseikatsu.org>

特定非営利活動法人 森の生活 2017年度年次報告書 2018年10月発行

本報告書の内容に関するお問い合わせは、  
右記までお願いいたします。

特定非営利活動法人 森の生活  
〒098-1204 北海道 上川郡 下川町 南町 477 番地  
TEL：01655-4-2606 FAX：01655-6-7007  
E-mail：info@morinoseikatsu.org